

三谷孝他著

『村から中国を読む
——華北農村五十年史——』

青木書店 2000年 vi+352+ix ページ

あおやぎりょうこ
青柳涼子

I

本書は、三谷孝(一橋大学教授)を代表とする「中国農村慣行調査」研究会のメンバーと中国側の研究者が、1990～95年の約6年間に華北5農村で行った聞きとり調査の記録に基づき、解放以降の華北農村社会の変容について論じたものである。聞きとり調査の内容は、共同研究という利点を生かして、政治・経済・社会の諸側面にわたっている。その記録は、すでに三谷(1993)、三谷(1999;2000)として刊行されており、とりわけ後者は、第1巻が約950ページ、第2巻が約750ページにもおよぶ大著であった。これらの著書が、主として調査記録の役目を果たしたものとすれば、本書は、著者たちが各自の専門分野から調査結果を分析し、その研究成果を発表した初の共同著作である。

さて、本書の最大の特徴は、1940年代に行われた「中国農村慣行調査」(以下、「慣行調査」)の再調査という点にある。「慣行調査」は、1940～44年に満鉄調査部所属の研究者たちが行った調査であるが、従来、戦時下の占領地における調査であったことを最大の理由に、否定的にみなされてきた。しかし、解放前の中国農村慣行を知る資料としては、これほど詳細なものは他に見られない。今回、調査対象となったのは、北京市順義県沙井村、北京市良郷県吳店村、河北省樂城県寺北柴村、山東省平原県後夏寨村、天津市静海県馮家村の5村である。戦後出版された「慣行調査」の報告書に残されているこの5村相互の情報量には差があるものの、著者達は、約50年前

の実情が記録され、残されている農村を再び訪ね、そこに暮らす農民にインタビューしてきた。本書には、華北農村社会の「過去と現在」があざやかに写しとられている。

II

本書の構成と各章の要旨は以下のとおりである。

序論(三谷孝)

第1編 村の歴史

第1章 解放前の村(内山雅生・笠原十九司)

第2章 毛沢東時代の村(浜口允子)

第3章 改革・開放期の農民たち(小田則子)

第2編 村落社会の変容

第1章 村と幹部(浜口允子)

第2章 農村経済の歴史と現状(リンダ・グローブ)

第3章 農村変革と農業田慣行(内山雅生)

第4章 華北農村の社会関係(中生勝美)

第5章 女性の暮らしと向性関係(末次玲子)

第6章 村の教育——歴史と現在——(笠原十九司)

第7章 村の廟と民間結社(三谷孝)

序論では、調査実施の経緯および5つの調査対象村の概況が示される。

第1編では、調査対象村の歴史が、「慣行調査」資料と今回の調査資料を用いて、通史的に記述される。

第1章の前半では、「慣行調査」資料に見出される日中戦争前の農村社会の実態に基づき、華北農村社会が「平和な伝統社会」として理念化されてきたことの意味を再考する。前近代の農村社会には、専制的・家父長的支配が存在する一方、地縁的・血縁的共同体として、農具等の共同利用や農繁期の相互扶助等が日常的に行われていた。「慣行調査」資料にうかがわれるこうした農村生活上の共同性が、国家政策の展開に沿うように農民たちによって常に再編され、かたちを変えて存続していたことが明らかになった。厳しい条件のなかで、共存していかなければならなかった農民は、時には既存の政治的宗教的勢

力にも対抗し、自分たちが望ましいと考える方向に状況を打開してきた。「平和な伝統社会」は、農民たちによって作り上げられたものといえるだろうと結論づけている。後半では、日中戦争勃発後、つぎつぎと日本軍の統治下に置かれることになった5村の実情を考察し、5村は地理的位置によって、「慣行調査」時、「治安の良かった村」と「治安が不安だった村」とに分けられること、また「解放」期に注目すれば、「解放の早かった村」と「遅くに解放された村」とに分けられることに言及して、村の地理的位置の相違が、占領統治期・国共内戦期における村の状況、解放と土地改革のプロセスに相違をもたらしたことを明らかにする。

第2章では、国共内戦期から改革・開放政策始動までの「毛沢東時代」における華北農村の歴史が、土地改革、農業の集団化、人民公社制度、調整政策と四清運動、文化大革命といった国家政策や運動との関連を中心に述べられる。そして漸次5村に行き渡った政策も、各村の諸条件によって、実施の経緯や村へのインパクト、その運動の強弱などに違いがあったことが浮かび上がる。

第3章では、「改革・開放」期に農村に生じた、経済的な環境の変化、政治的圧力の変化および社会組織の変化をとりあげる。生産責任制によって農民の収入は増加し、生活水準は「温飽」（衣食が十分に足りる）に達した。農業技術は改善され、副業復活と郷鎮企業の発展にともなう兼業化が進行している。かつて黒五類（旧地主、旧富農、反動分子、悪質分子、右派分子）とされた者も名誉を回復し、農民たちは、経済的な側面で社会的地位を上昇させることが可能になった。さらに村レベルにおける組織が、個別農家に対して生産の基礎的条件を整備する役割や、(村営)企業の運営や外来者の管理をする役割、農民の福利を提供する役割など、新たな役割を担うようになっていることをつきとめる。

第2編は、調査で得られた第一次資料を駆使して、各章個別のテーマで記述される。

第1章では、調査対象者の語りのなかに見出される「幹部像」が描かれる。土地改革前後で分けられる旧指導者層と新指導者層の間には、「断絶」の相と

「継続」の相があり、「断絶」の相は、地主層から貧農層へという指導者の階級的属性変化の側面に、「継続」の相は、過去の立場とネームバリューが指導者選択の際に影響力をもつという側面にみてとることができる。しかし建国後には、土地改革期の幹部はかなり淘汰されて、新たに、武力をもつ者、旧い観念を捨て去ることができた者が幹部になった。また解放軍帰り（共産党員）の重幹部を通じて中央の意思が村へ浸透していく体制が整えられたと考察している。人民公社時代、大躍進運動と自然災害、四清運動、そして文化大革命の時代にはいると、時代に翻弄される幹部の姿が描かれる。一転して、「改革・開放」期には、リーダーシップの有無がその村の発展程度を左右しており、村の経済をいかに成長させるかが、現在の幹部にとって最大の任務になっていると指摘している。

第2章では、はじめに5村それぞれの経済状況を1940年代当時と現在とで比較した上で、これらの村がなぜ異なる経済的プロセスをたどることになったのかを環境、立地条件、村のリーダーシップ、国の政策という4点から考察している。自然環境については、とりわけこの点で苦難の歴史を持つ村が事例的に検討され、立地条件については、都市近郊農村であるかどうか、リーダーシップについては、集団投資・集団活動が活発であるかどうかを問題として、農村間比較が行われている。国の政策が村の経済に対しても影響力の大きさを再評価した後、以上4点が複合的に組み合わせられたことによって、5つの村が異なる経済構造をもつことになったと結論づけている。

第3章では、村の「共同性」の問題を、農業慣行の変遷からとりあげる。農業集団化の過程で消滅したと思われた「看青」（作物の盗難を防ぐ監視制度）、「打更」（居住地域の見張り）、「搭套」（農家間の相互扶助的協力関係）といった伝統的な農業慣行は、新中国成立後においても、引きつづき状況適合的なかたちで存続していると指摘する。「人民公社化」は共同化の範囲を拡大させたが、結局、党の指導で作られた「人民公社」は、それまでの生活空間に規定された「個々の共同体」の集積であり、自立的に

発展したものではないという。村内の「共同性」は、農民の心の奥底に「共同意識に基づいたワク」や「無意識な伝統的村落共同体の意識」を残存させながら、地域の実情にに応じてさまざまな形態をとり、表出したり、あるいは沈潜したりするのである、とまとめている。

第4章では、農村生活で形成される人間関係のうち、「宗族」、「家族」、「地縁関係」をとりあげる。元来、華北農村において「宗族」の結集力は比較的に弱かったとされており、1990年代の本調査においても、強い宗族結合は見出されなかった。村の幹部の決定に宗族単位の配分が考慮されることはなく、「輩名」（同じ世代の宗族が名前共通の一字を付ける）や「五服」（服喪の形式。死者との親疎により、5段階に分かれる）の慣習からみても宗族範囲に厳格な規定はなかった。宗族の共有財産の消失にともない祖先祭祀は消滅し、「族譜」に象徴される系譜意識は希薄化の傾向にあることが明らかになった。次に「分家」慣行の変化から「家族」の変化をとらえている。かつての農村家族では「分家」は避けるべきものとされ、そのライフサイクル上には複合家族が出現することもあったが、現在は息子が結婚すると独立するようになったので、夫婦家族が圧倒的に多くなっている。このような分家時期の変化に加えて、その手続きや意味にも変化が生じていることを指摘する。さらに「地縁関係」に関しては、華北平原の村落の社会的特色である擬制的血縁関係（＝「世代ランク」）に焦点をあてて考察し、組織化されていない村ほど、世代ランクの認識も曖昧になってきていることを明らかにしている。従来地縁的血縁の集団や宗教結社といった「組織」は、国家政策や政治運動の影響を直接的に受けて解体、或いは公的組織へと再編成される一方、コネや縁故と訳される「関係」、血縁、姻戚、地縁、友人などさまざまなネットワークを重ね合わせた人間関係が社会生活のさまざまな場面で重要な役割を果たしていると述べている。

第5章では、1940年代以降、現在までの中国女性史の村レベルの展開を明らかにする。1940年代初期、農村における性差別は、纏足という習俗や、妾・童養媳（息子の嫁にするために幼い時に貰ったり、買

ったりして育てる女の子）の存在、不平等な遺産相続などにかがわれる。毛沢東時代には、国家の推進する婚姻・家族制度改革が女性の解放を支持したが、こうした政権主導の女性解放運動には性差別批判、家父長制批判という視点が欠落していたし、集団化の過程では、女性の社会的生産への参加は、結局、女性に過重の負担を強いることになった。新たな女性リーダーを生んだ四清運動や文化大革命期を経て、改革・開放政策開始以降、村の女性たちは工場労働や個人経営、副業など、さまざまな経済活動をするようになっていく。しかし村の女性たちによる主体的な女性運動はまだ展開せず、むしろ家族の経営権の回復と市場経済の発展が父権・夫権を勢いつけているという。今後の課題として、村の女性による主体的な女性運動の活性化の意義と、そのための支援体制を整備する必要性を提唱している。

第6章では、村の教育の歴史がとりあげられる。本章の目的のひとつは、村の小学校の歴史に注目して、村の歴史と現在を明らかにすることにある。またひとつには、国家の政治思想統制が、教育制度を利用して、いかに末端の農村地域に浸透したか、農村社会にいかなる影響を与えたか、という国家と農民の関係を明らかにすることにある。「解放前」、「解放期・土地改革期・建国期」、「反右派闘争・大躍進・人民公社期」、「文化大革命期」、「改革・開放期～現在」という5つの時代区分に基づき、各村の学校教育の状況を考察し、特に「反右派闘争～人民公社期」や「文化大革命期」に翻弄される農村教師の姿が描かれる。一方、この時代に、国家の方針が「上意下達」的に村の小学校で徹底することになった経緯が明らかになる。1978年、多くの教師が名誉回復し、これ以降教育が重視されるようになったが、農村教育の抱える問題は少なくない。具体的には、民辦教師（村レベルで雇用される教師。身分が保障されず、農業収入で生活する）の待遇問題や、行政単位別分級管理に起因する問題である。村の小学校の建設・維持の実態の差異に注目しながら、4村の小学校の現在を紹介し、農村教育の矛盾点を指摘している。

第7章では、1940年代以降の民間団体・結社の変遷を考察する。民国期、村の廟は村人の集会・祭礼・

憩いの場であるとともに、村の自治組織の活動拠点であった。しかし1910年頃から、民衆の生活は逼迫し、また南京国民政府の「迷信打破運動」によって廟は壊され、活動も消滅した。日中戦争期には、民衆の心理的不安を背景に宗教的秘密結社が勢力を拡大したり、日本軍によって「武装自衛組織」が再編成されたりした。一方で「郷社」、「碗社」といった相互扶助組織も存在した。しかし毛沢東時代になると、国民党に呼応する宗教的秘密結社は「反動的会道門」として取り締まられ、武装自衛組織も必要性がなくなって解体した。そして迷信打破運動の影響で、再び廟は破壊され、宗教的活動は規制された。「改革・開放」期に入って規制は次第に緩和され、村では廟が再建され、廟会も復活してきている。たとえば、寺北柴村では1991年に村人によって老母廟が再建された。廟会も復活し、毎年劇が上演されている。本調査によって、村の宗教活動が再開されていること、旧民俗慣行が変容しながらも存続していることが確認された。村民の間に経済的格差が生まれ、村民としての一体感が希薄化する中で、廟の復活が、村民の共有する時間と空間を再生させ、新たな環境の中での村落社会の共同性復活の試みを見ることができると結んでいる。

III

以上のように、本書は、実に多彩な研究領域からのアプローチによって華北農村社会の歴史を全的に捉えている。それゆえに、読み手は、まるで望遠鏡のレンズ倍率を変えるように、政策転換の直接的影響を受けた社会の移り変わりと、それに併せて時代に翻弄されながらも、その中でしなやかなネットワークを形成して生活する農民の姿を間近に見ることができる。これは、中国近現代史の専門家である著者たちが、「慣行調査」資料を丹念に読み込んだ上で、冒頭にも述べたとおり、地道な現地調査を実行した、その成果であるといえる。

ここで、敢えて若干のコメントをさせていただくとすれば、テーマによっては、異時点比較と地域比

較という2つの比較軸の一方のみが用いられるに留まっていることが気になった。本書の前半で地理的位置の違いによる5村の異なる歴史的展開が指摘されているので、やはり全体にその視点を盛り込む必要があるのではないだろうか。そして各章を通じて見出すことのできる華北農村の現在の特徴を最終的に何点か提示してもらえるとありがたかった。例えば、村のリーダーが担う役割の重要性は、ほとんどの章で指摘されていた。現代の中国農村を読み解く上で、「幹部」は重要なキーワードであることがわかった。その意味では、第2編第1章で集中的に「幹部」が考察されていることは、本書全体に有意義なことであったし、「幹部」に対する日本人研究者の理解に大きな学問的貢献をしたことになるであろう。また第4章で、土地の国有化により「分家」の際に作られる「分家単」の意味が、「遺産分割証明書」から「老親扶養証明書」へと重心を移してきていることが指摘されていることは、家族社会学を学ぶ評者にとって大変勉強になった。

本書は、本来ならば高度な専門書になるところであるが、幸いにも「学生、教師さらに一般の読者にも興味を持って読んで理解していただけるよう」と、構成に工夫がされており、非常に読みやすくなっている。中国農村社会が経験した激動の50年間を知ることのできた学恩に感謝するとともに、本書を広く中国に関心をもつ方々に薦めたい。

文献リスト

- 三谷孝編 1993、『農民が語る中国現代史——華北農村調査の記録——』内山書店。
 —— 1999、『中国農村変革と家族・村落・国家——華北農村調査の記録——』第1巻 汲古書院。
 —— 2000、『中国農村変革と家族・村落・国家——華北農村調査の記録——』第2巻 汲古書院。

(淑徳大学大学院社会学研究科博士後期課程)